
『復讐』【掌編・サスペンス】

山田文公社

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『復讐』 【掌編・サスペンス】

【Nコード】

N9765Q

【作者名】

山田文公社

【あらすじ】

雨が降るなか、傘を差した一人の男が交差点にたたずんでいた。男の眼孔は通りを走る車を見ていた……。

『復讐』 作：山田文公社

雨が降るなか、傘を差した一人の男が交差点にたたずんでいた。男の眼孔は通りを走る車を見ている。

午後10時30分頃、交差点を横断している自転車に黒いバンが追突して、自転車に乗っている女性を跳ねて逃走した。自転車の後ろには子供も同乗していたが、追突された際に頭部を激しく打ち死亡した。女性も救急車で搬送途中に亡くなった。黒いバンは未だに捕まっていない。

その日の朝は連日の会議の資料の作成で慌てていた。食事を取る時間すら惜しくて書斎で書類を作成しながら、妻の作ったサンドイッチをコーヒードで押し込んでいた。

「あなた、そろそろ時間ですよー」

居間から妻の声がかかり、私は壁に掛けられた時計を見た。すぐにパソコンを閉じて鞆に放り込み、スーツの上着を着て玄関へと向かう。

「今日も遅いんですか？」

そう言い、妻が私のネクタイを直し始めた。

「ああ、たぶん打ち合わせが重なっているから、遅くなる」

「なるべく早く帰ってくださいね」

「ああ、行ってくる」

私はそう言い妻の頬へとキスをした。

「お父さんいつてらっしゃい」

それを見ていた娘が小さな手を私に振った。

「行ってきます」

私は娘にもキスをした。

そして玄関を出た……それから私は仕事追われながら、気が付けば午後9時を過ぎようとしていた。同期と後輩を交えて今後の会議が終わり帰宅する頃には午後10時になっていた。いつも帰る道に家に電話を入れるのだが、その日は誰も電話に出なかった。

自宅に着くと家には誰もいなかった。食事を作る気力もなく、風呂に入ってビールを飲んでいると電話が入った。

「夜分申し訳ありません、こちら川津警察署の者ですが……」

それは妻が事故に遭った知らせだった。

人生においてあれだけ必死に走った事は無かった。病院に着くと警察に案内された場所は地下の霊安室だった。扉を開けると、シーツを被せた大きなベットと、小さなベットが並べられていた。私はまだ信じられずにいた。

「確認願えますか？」

私は恐らく頷いたのだろう、警察がシーツをはがすと、そこには妻と娘がいた。私はすぐるように警官を見た。警官はしばらく私を見た後にそつと顔をそらした。

恐る恐る一歩ずつ近付いていく。それは間違いなく妻と娘だった。震える手で妻の頬に手を添えると、驚くほど冷たく、そして硬かった。娘の小さな手にいつもものように、開いた手の中へ指を入れた。小さな手はいつもギュツと握り閉めていたのに、もう動く事はなかった。

「あ、あつ……」

今朝まで生きていた。今朝まで二人は生きていた。ベットの上で横たわる二人に私は泣きすぎた。

その日は、もう何もする気力も無かった。家に帰ると妙に広く感じる家が寂しくて仕方なかった。そしてあまりに苦しくて眠りにつけず、飾ってある酒を全部開けて、何度も吐きながら意識がなくなるまで飲んだ。

翌日目が覚めると昼を過ぎていた。会社から何度か電話があつたようだが、もう何もかもがどうでも良かった。ソファーに座っていると二人が亡くなったという現実が襲ってきた。

しばらくして死体の引き渡しと葬儀が始まる頃には、何とか現実を受け入れられるようにはなった。そして未だに犯人が捕まっていない事もこのとき知った。

そして葬儀中にもう涙を流す事は無かった。

葬儀が終わると私は仕事を退職した。幾ばくかの退職金と失業保険が出ることになった。その日から私は犯人を捜し始めた。その日から私は交差点に立ち犯人の車を探し始めた。

目撃情報によれば、車は黒いバンでスモークが貼られていて、ナンバープレートにも強いスモークで隠されていたらしく、車が特定できないという事だった。

必ず捕まえる、その信念で立ち続けた。

そしてある日……一台の車が通り過ぎた。それは確かに情報に聞くような車両だった。ナンバープレートを控えた私はその車の向かった方面へとすすんで翌日もそこで待ち、また見つけた場所から進んで待ち、地道に繰り返して待ち続けた。

そしてようやく車が止まる場所を見つけた。

黒いバンからは、短めの天然パーマをした小太りで全体的に丸い印象のある、龍や寅の刺繍のした黒スエットを着た男が出てきた。

「すいません」

「なんや？」

私の質問に男は関西弁特有の威嚇するような口調で聞き返してき

た。ひるまずに私は質問を続けた。

「2月20日の午後10時30分頃どこで何をされてましたか？」

「それがお前になんの関係があるねん？」

「実はその時間にあなたの車によく似た車両が目撃されてまして」

「なんや？ おまえ儂が犯人って言っんかい？」

男は下から睨み上げて詰め寄ってきた。

「いえ、どうされていたかを尋ねてまわっているんです」

「なんでお前に答えなあかんねん、なんやお前警察か？」

「違います」

「なんやじゃあ探偵かなんかか？」

「私の妻と娘です」

「ほんで儂が犯人やと？」

「いえ、ですから……」

言い終わらない内に殴られた。倒れた所を執拗に蹴り飛ばされた。

「おまえ二度と儂の前に姿晒すなよ！」

そう言い男は去っていった。あちらこちら痛むが私は起きあがり車を見てまわった。どこにも傷もへこみも無かった。恐らくは修理した後のだろう、ふらつきながら先ほどの男の後を追った。

マンシヨンの一室に入っていたのを確認して、再び男の家を訪ねた。

「なんや、お前さっき言っただ事が分からんようやの？」

「2月20日の午後10時30分頃どこで何をされてましたか？」

「お前……しつこいのう？ ほなお前も死んだ家族の後、追つか？」

笑いながら男が言ったのを聞き、私は質問を変えた。

「あなたがはねたんですか？」

「そうや……文句あるんか？」

もう、その言葉が聞けたので充分だった。確信はなかったが、なぜか一目見たときから犯人だと感じていた。

「ようやく見つけた……」

私は嬉しくて笑った。

「なんや仇でもとるんかい？」

「ええ、勿論そのつもりです」

そう言い私は懷から拳銃を取り出すと男に向けて引き金を引いた。乾いた破裂音がした後に男は驚いた顔で私を見ていた。私は容赦なく引き金を何でも引いた。爆竹のような乾いた音が何度もマンションに響くと、男は全身から血を流して倒れた。

男はソファーに座り過去のアルバムを開いていた。家族と過ごした楽しい思い出がそこには詰め込まれていた。全てを失った男はアルバムを見終わりゆっくりとアルバムを閉じた。そしてテーブルに置かれたウイスキーの入ったグラスを飲み干すと、脇に置かれた拳銃を、こめかみに当てて、ゆっくりと引き金を引いた。

「いま、逝くから……」

乾いた音が鳴り響くと、男はソファーへと倒れた。

(後書き)

お読み頂きありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9765q/>

『復讐』【掌編・サスペンス】

2011年2月17日01時55分発行